令和5年度新里福寿大学

第8回講座

「新里のおもしろい文化財」

令和5年11月21日（火）

新里総合センター3階
大会議室

講師の加部氏

伝習館
石原副館長

今回の講座は、恒例の歴史講座「新里のおもしろい文化財」です。桐生市新里町は、今から２３００万年～５３０万年前の第三紀中新世の時代に海であったことがわかっています。昭和４５年頃に新里駅南側で貝の化石が見つかり、当時の近隣小学生が挙って探しにくる一大ブームがあったとのことで、講師の加部先生ご自身も小学４年生の時に電車に乗って化石を拾いにきたというエピソードを交えて説明していただきました。

人類が活動し始めた旧石器時代の日本には、北海道にマンモス、本州にナウマンゾウがおり、それらを捕まえるために石斧が使われていたそうです。旧石器時代（岩宿遺跡の調査品に石斧がある）の石斧は見つかることが少なく非常に貴重なもので、新里町で出土する石斧は、ほぼすべて縄文時代のもので、木を切ったり、土地を耕したりしたものであったそうです。

また、新里町の早川は元々渡良瀬川の一部だったそうで、奥沢の三沼より東に枯れた谷があり、それが渡良瀬川であった名残であるとのこと。早川より東は渡良瀬川の大間々扇状地であまり人が住んでおらず、西側の新里町は、人が住んでおり、武井遺跡等の沢山の遺跡があるとのこと。弥生時代は、稲作中心になり赤城山の麓である新里町に、ほとんど人が住んでおらず、弥生時代の遺跡がほとんどないそうです。

更に時代が経つと新里町には、上円下方墳である中塚古墳、八角墳である武井廃寺跡、五角形墳である長者塚古墳があり、前方後円墳を作るような巨大な力を持った豪族ではないが、地方の有力者クラスの豪族が住んでいたことが、その古墳たちをみるとわかるそうです。また、世界記憶遺産の上野三碑「山ノ上碑」に大児臣と新川臣の文字があり、その新川臣の墓とされるのが新里町の中塚古墳であること。世界遺産に関連する遺跡があることは、桐生市民として誇りであり誉であることを教えていただきました。

後半は、古墳時代終末期に仏教が伝来し、各地で古代寺院が建てられるようになり、新里町でも寺院の屋根瓦を生産する瓦窯があり、伊勢崎市の上植木廃寺に供給していたこと。

また、新里町山上地区にお経を納めた山上多重塔（平安時代に建立）があり、中世から江戸時代にかけて、関・高縄・大梨子（３ヵ所）に摩崖仏が彫られる等、新里地区は古くから仏教と関わっていたということがわかりました。

加部先生におかれましては、受講生が興味を持つように、今までの発掘での沢山の経験を元に話を進めていただき、今まで知らなかったことを多岐にわたり、おもしろく話をしていただき大変ありがとうございました。

講座風景